

地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

第152号 会報 1996年5月20日

目次

第99回総会・講演会報告	1	合同欧文誌に向けての作業委員会報告書	8
会長挨拶	2	お知らせ	10
田中館賞審査報告	2	平成7年度決算・平成8年度予算書	10
田中館賞受賞者より	4	地球物理学研究連絡委員会議事抄録	13
第185回運営委員会報告	6	学会創立当時の思い出	14
山田科学振興財団研究援助候補の推薦	6	SGEPSS Calendar	15
次期の編集委員会に向けて	7	地球電磁気・地球惑星圏学会名簿調査	16
JGG論文奨励賞について	7		

第99回総会・講演会報告

第99回地球電磁気・地球惑星圏学会総会・講演会は1996年3月26日(火)より29日(金)の4日間、大阪大学旧教養部において1996年地球惑星科学関連学会合同大会として、開催された。本学会では、「地球磁場の起源：観測と理論の発展」、「全地球史解説」、「テクトニクス」、「放射性廃棄物の地層処分に関する地球科学的課題」、「現在の地震学と兵庫県南部地震」、「大陸地殻の深部構造と進化II」の六つの共通セッションと八つ行われたシンポジウムすべてを共催した。また、固有セッションでは15のセッションでおよそ300件の講演・ポスターの発表がなされた。

総会は、議長として指名を受けた兵頭政幸運営委員によって下記の様な議事の進行がはかられた。

1. 開会の辞
2. 総会議長指名
3. 田中館賞授与 (國分会長)
4. 田中館賞審査報告 (國分会長)
5. 会長挨拶 (國分会長)
6. 運営委員会報告 (湯元総務)

7. JGG編集委員会報告 (河野編集委員長)
8. 議事

- 平成7年度決算 (笹井運営委員)
- 平成8年度予算 (笹井運営委員)
- 合同欧文誌について (横山運営委員)
- 次期開催地 (丸橋会員)
- 次々期開催地 (大志万運営委員)

9. 閉会の辞

本総会では、田中館賞授与(大村善治会員、高橋主衛会員)に続き、國分会長の挨拶、河野JGG編集委員長の報告があった。議事では平成7年度決算と平成8年度予算が承認されたのち、合同欧文誌に関して現状の報告と審議があった。その結果、「合同欧文誌に向けての作業委員会」の結論を受けて当学会として具体的な検討を進めることが承認された。次期開催地については郵政省通信総合研究所の丸橋克英会員より、開催日が10/21(月)~10/24(木)で準備が進んでいる旨報告があった。次々期総会は合同大会に参加することが提案され可決された。開催地は名古屋の予定で日程は3/25(火)から3/28(金)との説明があった。

◆裏表紙に名簿改訂アンケートがあります◆

今年の秋に学会名簿の改訂版を出す予定です。現在名簿の記載事項に変更のある方はこの会報の最後のページのアンケート用紙に記入の上、締切日までに学会事務センターにお送り下さい。

第99回地球電磁気・地球惑星圏学会総会に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

現在学会として解決しなければならない課題をいくつか抱えておりますが、学会活動の最も重要な一つであるJGG誌に関連して新しい動きが始まりつつあります。昨年の総会でも報告いたしましたが、本学会からの呼びかけに応じて、「合同欧文誌に向けての作業委員会」が発足し、合同欧文誌発刊の可能性について具体的な検討が行われてきました。これは、平成7年9月5日付で、地震学会、火山学会、惑星科学会および測地学会会長宛に、合同欧文誌に向けての検討の場を設けてはとの提案に賛同が得られたことによっています。

作業委員会の具体的な検討事項としては、既存のJournal of Geomagnetism and Geoelectricity 及び Journal of Physics of the Earth を発展させたものとしての合同誌の性格についての議論、財政的基盤、配布方式、編集体制、新ジャーナルの成立条件及び移行時期等が考えられます。

これまでに3回の会合が開かれ(7年12月25日、8年2月8日、3月12日)、委員会として検討結果がまとまっております。検討の経緯については、議事録が公開されてきたので多くの方はご存じのことと思いますが、委員会は、地球惑星科学関連を包括する総合ジャーナルを持つ時期にきており、既存のジャーナルを引き継ぎ新ジャーナルを作る動きを進めることを提言しています。新ジャーナルへ

の移行時期としては、1998年1月を目途として、今後の具体的な作業を開始するよう希望しています。また、作業委員会としては、当初の使命は終わり、これまでの検討結果をそれぞれの学会に持ち帰り検討し、次のステップを移るべきとの見解を出しています。

本日の総会では、この委員会がまとめた「合同欧文誌に向けての作業委員会報告」をもとに、今後の進め方について会員各位の忌憚のないご意見を戦わして戴けるよう議題として提出しております。当学会は、50年の歴史を刻もうとしておりますが、これまで諸先輩のご努力により作り上げられてきたJGG誌が新しく生まれ変われるか否かという重要な問題であり、この問題の今後の進め方に資するご意見を戴きたいと考えております。

大林奨励賞については、前期大家会長、運営委員等のご努力により賞の制定が決まり、新たに発足することになりました。運営委員会としては、森岡会員に委員長を委嘱し、大林奨励賞候補者推薦作業委員会を作り、第一回目の受賞者の選定に向けて作業を開始しました。同委員会は、昨年末より4回の会合を持ち選考の手続きを進めております。受賞者の決定は、内規により評議員会の議を経ることになりますが、この秋の第100回総会に第1回の授与が行われるよう手続きを進めたいと考えております。

簡単ですが、総会では重要な議題が議論されることになっておりますので、これをもって挨拶とさせていただきます。

田中館賞審査報告

平成8年度の地球電磁気・地球惑星圏学会「田中館賞」は、大村善治会員および高橋主衛会員に授与されることが決定されました。

第140号 著者 大村善治 会員

論文名 計算機実験による宇宙プラズマ中の非線型波動粒子相互作用の研究

宇宙空間プラズマ中には、高エネルギー粒子との相互作用により励起される様々なプラズマ波動が存在しており、その波動粒子相互作用を通じて波動の二次放射、粒子の加速・加熱などの非線型物理現象

が生じている。大村会員は、プラズマ物理の基本方程式を計算機により解くことによって、宇宙空間における波動現象の発生やそれに伴う非線型物理過程を再現する「計算機実験」のプログラムを開発し、計算機実験が解析的理論の限界を打破し、理論と宇宙観測・実験との橋渡しをする有効な手段であることを示した。

特に、粒子モデルの計算機実験コードを独自に開発し、ホイッスラーモード波動粒子相互作用の非線型時間発展の大規模シミュレーションを行った。不均一な地球磁場中でのホイッスラー波の成長、減衰

および周波数変動の物理機構を明らかにし、磁気圏 VLF トリガー エミッションの発生機構の研究を大きく進めた。また、電子ビームとのサイクロトロン共鳴とランダウ共鳴によって同時に励起されるホイッスラーモード波と静電波との競合過程を計算機実験によって解明することに成功した。

また、ULF イオンサイクロトロン波によるヘリウムイオンの研究では、電子を流体として扱い、イオンを粒子として扱う電磁ハイブリッドコードを開発し、イオンサイクロトロン波の励起からヘリウムイオンが加熱される非線型過程を再現し、加熱機構を理論的かつ定量的に解明した。

最近の研究では、MHD シミュレーションと電磁波のレイトレーシングとを組み合わせ、地球磁気圏尾部で観測される電磁波動の伝播特性を明らかにした。また、磁気圏尾部領域で「GEOTAIL」衛星によって観測されている静電的な孤立波の生成機構として、電子の二流体非線型発展の結果生じるBGKモードであることを提唱し、計算機実験と観測との比較を通じて、その機構の妥当性を検証した。

このような一連の非線型波動粒子相互作用の研究において開発された計算機プログラムのうち、KE MPO と呼ばれる電磁コードは、広く宇宙プラズマ波動の研究に利用されている。同会員は、これらの計算機実験における先駆的な業績により、1992年COSPARよりゼルドービッチ賞を授与されている。

以上のように大村会員の研究は、独創的な研究として当該分野の研究進展に大きく寄与したことが評価され、田中館賞の授与が決定されました。

第141号 著者 高橋主衛 会員

論文名 磁気圏脈動のエネルギーと伝播特性の研究

磁気圏の内部に存在する超低周波帯の電磁場振動は、地磁気脈動として比較的古くから知られており、基本的には磁気流体波の励起・伝播によると理解されている。しかし、磁気圏には、様々なモードの脈動が存在し、それぞれが複雑な磁気圏内のエネルギー輸送に関連しており、その全容の理解にはま

だ至っていない。高橋会員は、この十数年間、磁気圏衛星の電磁場、プラズマデータを総合的に解析し、さらに理論的に検証を行い、磁気圏脈動のエネルギー源や伝播特性の解明に多くの業績を挙げてきた。これまでの研究は、(1) 外部(太陽風)に源を持つ磁気圏脈動、(2) 磁気圏内プラズマの不安定による脈動および(3) 磁気圏嵐に伴う脈動に分けることができる。

(1)の研究では、昼側の現象であるPc3-4脈動が、アルヴェーン定在波として調和構造を持っていること、太陽風のスピードが大きいほど、またラジアル磁場成分が大きいほど発生頻度が高いことを発見している。この定在性の数次高調波が励起されるという事実は、太陽風・磁気圏の直接的相互作用によって起こされる脈動励起の理論に大きな影響を与えた。さらに、(2)の研究では、磁気圏プラズマ粒子フラックスの振動を調べ、磁気圏波動現象に赤道環電流粒子に起因するものがあることを示した。特に、100keV程度のイオンによる新しいモードの共鳴現象(ドリフトバウンス共鳴)の解析は、磁気圏脈動の定量的理解に運動論的取り扱いが重要であることを示した。

磁気圏嵐に伴う脈動の研究では、磁気圏嵐の急始に関係するPi2脈動の衛星高度・地上での関係を詳しく調べ、 $L=2\sim 6.6$ の広い領域で観測されることを示し、Pi2脈動が磁気圏電流の欠落(current disruption)に伴う現象であることを決定づけている。また、この磁気圏電流の欠落は、従来考えられていたよりかなり地球に近い領域で起こることを見出し、磁気圏嵐の研究にもインパクトを与えた。

高橋会員の研究が国際的に高く評価されている点は、データ解析による現象論的な新しい知見と共に、それぞれの結果に対して理論的検討を加え、その後の脈動励起機構の理論の発展に重要なインパクトを与えたことにある。

以上のように同会員は、磁気圏脈動の研究を通じて、脈動研究のみならず磁気圏嵐の研究の進展にも大きく寄与したことが評価され、田中館賞の授与が決定されました。

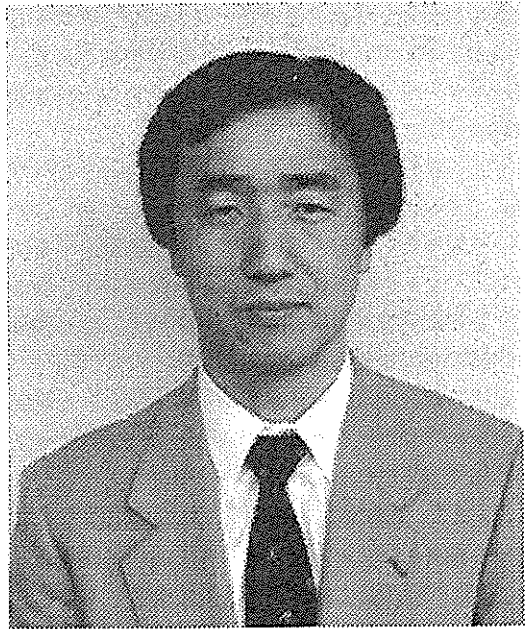
田中館賞受賞者より

大村善治会員（京都大学超高層電波研究センター）

このたびは田中館賞を授与頂き真にありがとうございます。受賞対象となりました計算機実験による宇宙プラズマ中の非線形波動粒子相互作用の研究は、私が1979年に京都大学工学部付属電離層研究施設に学部4回生の卒業研究生として配属になり、松本紘先生からご指導頂いたことから始まったものです。過去16年を振り返ると、京都大学超高層電波研究センターおよび京都大学工学部、宇宙科学研究所の多くの先生方にご指導頂きました。特に松本紘先生、木村磐根先生には研究のみならず、あらゆる面においてご指導頂き、ここに深く感謝致します。

私が研究室に配属になった頃は、丁度、EXOE-B衛星が打ち上げられて、衛星観測によるプラズマおよび粒子のデータ処理が始まったところで、研究対象となったのは特に、電子モードのホイッスラー波に関する波動粒子相互作用でした。その後、GEOS衛星で観測された電磁イオンサイクロトロン波と高エネルギーのヘリウムイオンに関する波動粒子相互作用の研究に参加させて頂きました。この研究は、UCLAのDr.M.Ashour-AbdallaとフランスのDr.R.Gendrinとの共同研究としてハイブリッドコードを開発してイオンモードの波動粒子相互作用の計算機実験を行うというものです。当時、私は博士課程の学生で、M.Ashour-Abdalla、R.Gendrin両先生からは科学的真理を探求する研究者としての厳しい姿勢を教わり、大きな影響を受けました。

その次に取り組んだのは、宇宙研の大林辰蔵先生が中心となって進められていたSEPAC実験に関する計算機実験で、スペースシャトルから電子ビームを放出した時に、どのようなプラズマ波動が励起されるかという問題でした。宇宙プラズマ中に電子ビームを放出する問題は、SEPAC実験のみならず他の実験においても行われ、工学的応用につながる重要な問題として関心呼びました。その後、EXOS-D衛星によるプラズマ波動観測において、ホイッスラーモード波によるトリガーエミッションが観測されて、また新たにホイッスラーモード波動粒子相互作用の研究に取り組みました。最近では、GEOTAIL衛星のプラズマ波動観測装置の波形捕捉器によって特異な静電孤立波が初めて観測されましたが、この波形が電子ビーム不安定性の計算機実験において私達が従来から見つけていたBGKモードであることを直観的に類推し、波動および粒子の観測データの解析によってそれを確認することが出来た



ことは大きな喜びでした。

以上のように、私は専ら計算機実験という研究手法を使って研究を進めて来ましたが、その研究の目的としては常に科学衛星観測や能動実験における波動現象の物理機構を解明することであり、また場合によっては観測に先立ち結果を予測することでありました。したがって、計算機実験の研究を推進する上でも、以上のような観測および実験のプロジェクトが原動力となっており、これらのプロジェクトを立案し推進されて来られた方々に感謝致します。そして今後も、科学として面白いプロジェクトを引続き提案し遂行してゆくことが太陽地球系物理学の分野の発展を図る上で大変重要であると思われま

ここで過去16年間における計算機ハードウェア環境の変化を考えてみますと、私が学部4回生および修士の学生の頃利用出来た主記憶の容量は数MBytesでした。それが今では、数Gbytesにまでなっています。計算速度も同様に当時数MFLOPSであったのが今では数GFLOPSになっています。このように計算機の能力が3オーダー変化するとそれは単なる量の変化ではなく質の変化をもたらします。本稿では、一般的には計算機シミュレーションと呼ばれている研究手法を計算機実験と呼んでいますが、これは、計算機実験が単に模倣するだけの手段だけではなく、そこに新しい物理を発見することの出来る実験であることを強調したいからです。今後も、計算機の能力は超並列化により引き続き飛躍的な進歩をすると

思われます。計算機実験で扱える物理現象もさらに拡大して行くことが期待されます。この計算機技術の先進性を有効利用するべく、宇宙空間における観

測や実験のプロジェクトと共に、計算機実験も一つのプロジェクトとして推進してゆかなければならないと考えております。

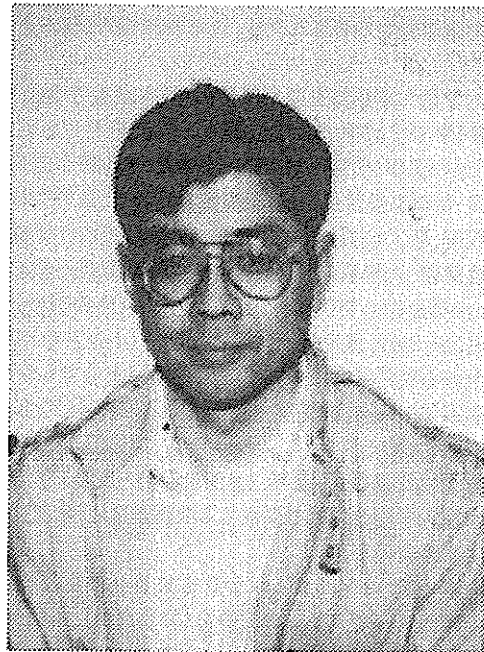
高橋主衛会員（名古屋大学太陽地球環境研究所）

このような形で賞をもらったのは、小学校の運動会の短距離走で一等になって以来であると思う。競走で勝つのは自分一人ではできるが、研究に関してはそれはありえない。まず、私が学生の時に指導して下さった方々、学位を取った後に共同研究につきあってくれた仲間、そしてこれまでの私の研究の成果を認めて今回の授賞のために自分の研究時間を犠牲にしているいろいろな手続きをして下さった方々に深く感謝したい。

田中館賞に特別な年齢規定は無いようであるが、最近の受賞者の経歴を見ると、大体中堅の研究者に与えられるものようである。私自身に関していえば、大学院に進学して地球物理学を始めてから約20年、これから定年まで無事在職すればあと約20年あるわけだから、田中館賞には研究者としての経歴の中間点でこれまでの反省をして今後のことを考えなさいと促す意味があると考えられないこともない。

反省することならいくらでもある。学生の頃に基礎的なことをもっと勉強しておけばよかった。そうすれば、学会で簡単だけどいやらしい質問にももっとかっこ良く答えられたろうに。あるいは、あの論文でもっと本質的な議論ができたろうに。時間の使い方もうまくなかったな。なぜあんなつまらない研究課題にあれだけ無駄な時間を投資したのだろう。他人との関係も必ずしも良好ではなかった。なぜ、周りにあれだけ優秀な人がいっぱいいたのに、自分から積極的に意見を聞きにいけなかったのか。あるいは、逆にどうして他の人に対して自分の意見をはっきりいえなかったのか、等々。

自分ながら、いい判断をしたと思っていることもある。それは、学生のうちに国外に出たことである。実際、日本で大学院生を始めた時は、とても地球物理で生活が成り立つとは思えなかった。周りを見ると、IQの点では私などとても及ばない人がうようよいいた。私が目立ったのは宇宙研に出張した際、所内のサッカー大会でモグリで活躍したとき位ではなかったろうか。しかし、西海岸に行ってみると、とんでも無くできる学生も多くいたが、とんでも無くできない学生もいて、一学期を過ごしてみると、自分でも何となく通用しそうな気がした。そして、（特に地球物理の）研究で成果を出すには頭の良さというより、執念深さのほうが重要であることも体験的に理解できた。卒業の後、何回か危機的局面は



あったが、最終的には米国内でもちゃんとした研究職につくことができたし、多少研究成果も挙げることができた。優れた教育環境が凡才に対して与える影響は恐ろしい。

さて、この先のことはどうか。過去20年の自分の仕事ぶりを振り返ると、この先20年でどれだけの仕事ができるかは、少なくとも数量的にははっきりしすぎるほど、はっきりしている。体力は下降するし、記憶力は向上するはずもない。要領が少しは良くなっているが総合的には下り坂である。しかし、幸いなことに私は個人で研究をしているわけではない。学生も持てる立場になったし、国内外に共同研究で頼れる仲間もいる。学生の頃とちがって、神経も少しは太く（鈍く？）なって対人関係であまりストレスを受けることも少なくなった。良くわけのわからない日本特有の問題については、給料を払ってくれている国民全体に対して、どのような行動を取ることが最大のサービスとなるかを考えれば（他人はどう思うか知らないが）自分で納得できる判断を下せることもわかった。家族の理解も十分にある（感謝しています）。つまり、まだ十分やれそうな気がする。皆さん、これからもご協力宜しくお願いします。

第185回運営委員会報告

日時 平成8年3月26日(火) 17:00~20:00

場所 大阪大学豊中キャンパス

ロ号館2階 ロー27会議室

前回の議事録が承認された後、以下の諸報告がなされた。

1. 合同学会の事務局を東京工業大学(本蔵義守会員)に置く事で検討中である。(連絡会幹事)
 2. 152号の会報を5月下旬に発行するために、総会会長挨拶、新編集委員長挨拶、田中館賞受賞者、運営委員会報告、新入会員紹介等、合同誌に向けての作業委員会報告、人事募集、研究会派遣等の記事原稿のe-mail提出締め切りを5月10(金)とする。(庶務担当)
 3. 10月21-24日、郵政省通信総合研究所(小金井市)で開かれる次期学会については、第100回大会でもあり記念事業や特別講演等を企画している。2会場になる。(秋期大会担当)
 4. 次期合同学会は、平成9年3月24日(月)-28日(金)に名古屋大学旧教養部で開催する準備が進められている。(連絡会幹事)
 5. 1996年4月から発足する学会誌編集委員会の委員として、河野 長(委員長)、寺沢敏夫(副委員長)、本蔵義守、福西 浩、深尾昌一郎、小川康雄、田中高史、渋谷秀敏の8名の会員に委嘱した。ただし、諸般の状況を考慮し、2年の任期の委嘱にした。(会長)
 6. 日本学術会議第17期会員の選出に係わる学術研究団体の登録について、役員、学会活動の資料作成を5月中旬までに行う必要がある。(総務)
- また、以下の議事について審議がなされ、承認された。
1. 新入会員承認・退会者確認について
 - ・正会員の承認;
堤 雅基(国立極地研究所)
 - ・正会員(学生)の承認;
香川晶子(奈良女子大学理学部)
 2. H7年度決算について検討され、健全な運営であることが確認された。また、H8年度予算の内容についても検討がなされ総会に諮ることになった。但し、大林奨励賞のメダル作成の為に、特別会計をつくることになった。
 3. 学校科目「地学」関連学会連絡協議会に当学会も田中・三浦運営委員が参加し、「地学」の小中等教育について学会としても改善に努めていくことになった。手始めに、当学会に関係する教材がどの程度取り上げられているかの調査を行い、また、各大学や共同利用機関で企画されている小中学生への一般公開時の講演会などの啓蒙活動等も調査することになった。
 4. 大林奨励賞作業委員会の経過と秋の学会での受賞候補者について検討がなされていることが報告され

た。

5. 山田科学振興財団の応募(3/31締め切り)の学会推薦候補者について2件以上の応募希望者があったので、前回の運営委員会の審議に従い、会長が評議員や関係者の意見を収集し、学会推薦として2件[津田敏隆(京都大学超高層電波研究センター)、田中秀文(高知大学教育学部)会員]の候補者を決めた。
6. 国際交流事業の若手研究者派遣について申し込みが有り審議した結果、小田啓邦会員(地質調査所海洋地質部)を1996年7月23-27日にブリスベンで開催されるWPGM(Western Pacific Geophysics Meeting)に派遣することになった。
7. JGG誌問題検討について
「合同欧文誌に向けての作業委員会」の経過についての報告をもとに議論がなされた。また、総会の議題にすることになった。
8. 創立50周年記念事業について、秋の第100回大会においては、特別講演、分野毎のポスターレビュー、学会賞や名誉会員の推薦、具体的な出版物の企画等がWGで検討されつつある。
9. 第99回総会の式次第及び議題の内容について審議された。
10. 「地球環境科学関連学会協議会(仮称)」の設立構想の検討についての呼びかけについては、運営委員会としては賛同するが合同学会との関係をはっきり位置づける必要があることを踏まえて、佐藤夏雄委員と会長推薦の2名を構想検討委員会の委員として推薦する事になった。
11. 次回運営委員会
・日時:平成8年6月7日(金)13:00-16:00
・場所:国立極地研究所内(詳細は後日連絡)
(総務担当運営委員)

山田科学振興財団研究援助候補の推薦

1996年度山田科学振興財団研究援助推薦に対して、4件の応募がありました。学会推薦は2つに限られているので、運営委員会で決められた選考方法により下記の2つを学会推薦候補として、山田科学振興財団に申請しました。

研究主題「モディファイド古地球磁場強度実験」

研究代表者 田中秀文

研究主題「流星がもたらす惑星間物質が地球大気に与える影響」

研究代表者 津田敏隆

次期の編集委員会に向けて

編集委員長 河野長

我々の編集委員会は4年間の任務を終え、この3月末を持って新しい編集長以下の委員会へ引き継ぎを行なうことになっていた。規約にのっとり、運営委員会と編集委員会から推薦された各3名ずつの選考委員によって新しい編集委員長が選出され、それ以後新編集委員長が学会会長と相談して新しい編集委員を選ぶはずであった。しかしこれらの予定は残念ながら実現しなかった。今年1月になってから園分会長から電話があり、選考委員会は同じ編集委員長の体制をあと2年続けたらどうかと提案したとのことである。「あと2年」というのは丸8年間続けさせるのはあまりに気の毒だということ、2年くらいの間に合同誌の問題がある程度進展すると考えられるのでその時新体制がとれるようにしたい、という両方の含みがあるらしい。「統投せよ」という要請があったら断ろうと心に決めていたのに、園分会長と電話で話をしている間に「何となく」引き受けてしまった。さあ大変である。「2年だけ」という条件と園分会長の物柔らかな口調にうかうかと引っかかってしまったとしか思えない。あとになって後悔したがもう間に合わない。何とかあと2年間努力しなければならぬ。

編集委員長としての私の立場は、SGEPSSの会員の方々にもこれまで明確にしていたと考えている。編集委員会はいわば編集というある種の技能を持ったテクノクラートの集団で、レビューの質の向上や適切な判断によって雑誌の質の向上をはかることができる。しかし、JGGのように小さな学会が大きな機関誌を持っているために投稿のみでは維持できない、といった構造的な問題をかかえている場合にはそのような問題の解決は編集委員会の裁量の範囲を越えている。だからこの点に関し学会の関心をよび起こし、学会として適切な変革を実施するよう総会や学会ニュースなどを通じて訴えてきた。私の考えでは問題は明白なのにこれに対する学会側の反応は大変におく、従って昨年の総会では「決別の辞」といっても良いような発言をした(会報148号参照)。まあ私はおそらく短気にすぎるのであろう。昨年あたりからこの問題については運営委員会が中心になって取り組み、他の学会と合同誌の発行について検討するワーキンググループもできた。もし順調に行けば2年くらいで合同誌への移行が現実の問題となっているかも知れない。いずれにしても編集委員会が学会の向かってキャンペーンをやる必要はもはやなさそうである。JGGが最終的にどうなるかはわからないが、ともかく運営委員会が中心となって学会の大きな問題として取り組んでいることは間違いな

い。

以上のような状況下であと2年編集委員会を続けるとすると、これまでの4年間で実現に努めてきた「高い質を持った均一なレビュー」ということを、単なる技術としてでなく、合同誌にでもそのまま引き継げる「システム」として定着させることが最も重要な任務ではないかと考えられる。この線に沿って以下の8名で国内の編集委員会を構成することにした。

編集委員長	河野長	(東京大学)
副委員長	寺沢敏夫	(東京大学)
編集委員	福西浩	(東北大学)
	本蔵義守	(東京工業大学)
	深尾昌一郎	(京都大学)
	田中高史	(通信総合研究所)
	小川康雄	(地質調査所)
	渋谷秀敏	(熊本大学)

このうち最初の4名は前期からの継続、あとの4名は新任と見ることができる。前期は全部で14名の国内編集委員がいたが、上記4名の他は編集実務は担当せずJGGの将来問題を検討していただくという役割回りになっていた。先に述べたように編集委員会のこのような機能は、学会が全体としてJGG問題に取り組みはじめた現在となつては不要であろう。従って今期の8人は全員が編集実務を担当する予定である。これからの2年間、JGG誌に対し以前にも増してSGEPSS会員各位のご支援をお願いしたい。

JGG 論文奨励賞について

編集委員会は、1995年のJGG論文奨励賞の選考を進めるために、下記の要領で推薦を募集しています。是非多くの推薦をお送りいただくようお願いします。

推薦資格 :なし

対象候補者 :JGG第47巻(1995)にファーストオーサーとして論文を発表したもので投稿時に40才未満であったもの。

必要書類 :候補者氏名、論文題目、掲載巻、号、ページ(1995)、推薦理由をA4用紙1枚(相当)以内にまとめたもの

送り先 :河野長

email : mkono@geoph.s.u-tokyo.ac.jp

fax : 03-3818-3247

住所 : 〒113文京区弥生2-11-16

東京大学理学部地球惑星物理学教室

締め切り :1996年6月30日(必着)

合同欧文誌に向けての作業委員会報告書

1996年3月25日

合同欧文誌に向けての作業委員会

背景説明

合同欧文誌に向けての本作業委員会は、地球電磁気・地球惑星圏学会より提案（平成7年9月5日）され、JGG（Journal of Geomagnetism and Geoelectricity）及びJPE（Journal of Physics of the Earth）関連学会の日本火山学会、日本地震学会、日本測地学会、日本惑星科学会の賛同を得て、これら5学会合同の作業委員会として発足したものである。これまでに第1回（平成7年12月25日）、第2回（平成8年2月8日）、第3回（平成8年3月12日）にわたり、主として合同欧文誌発刊の可能性について具体的検討を行ってきた（ただし、日本測地学会は第2回から参加）。これまで委員会で検討してきた事項及び委員の意見は多岐にわたるが、その多くは議事録として公開しているため、以下では集約した意見についてのみ報告する。

作業委員会委員

大久保（測）、小野（電）、川勝（震）、菊地（震）、小屋口（火）、末広（震）、田近（惑）、巽（火）、比屋根（惑）、福西（電）、本蔵（電）、山本（電）、横山（電）

〔（ ）内は代表する学会。電：地球電磁気・地球惑星圏学会；火：日本火山学会；震：日本地震学会；測：日本測地学会；惑：日本惑星科学会〕

1. 理念

地球惑星科学関連学会による合同大会も定着し、従来の学会の枠を越えた共通セッションやシンポジウムがいろいろ企画されて活発な成果発表及び議論が展開されている。一方、Lunar Aを始めとする惑星ミッションシリーズにおいても、従来の分野の枠を越えた新しい研究に大きな期待が寄せられている。さらに、「全地球ダイナミクス」、「海半球プロジェクト」等のこれから動き出す大型プロジェクト、「GPS気象学」のような独創的発想に基づく研究等はいずれも従来の分野の枠を越えた研究計画である。

ところが、こうした最近の流れから期待される研究成果の発表については独自の対応が遅れており、このような研究成果を世界に向け包括的に発表する

ことが、いろいろな分野を包括する総合的ジャーナルを持っていないために、必ずしも十分であったとは云えないとの認識が高まりつつある。他方、科学は本来的に国境を持たず、一流と目される既存のジャーナルに投稿することで研究発表は十分であるとの指摘があることも事実である。しかし、我が国独自の研究成果を我々自らの評価に基づいた情報として世界に向け発信することは、独自の新しい発想を産み出す土壌の形成及びそうした土壌に根ざす科学の創造という観点からも必要なものであると確信する。そして、情報発信手段としてのジャーナルを考える際には、我々独自の評価システムを可能とする編集体制を我々の手で構築することが不可欠となる。このような評価システム、編集体制は普遍的（科学として）なものでなければならず、従って、我々が目指すジャーナルは当然 International なものでなければならぬ。また、海外からの旺盛な投稿も International Journal としての必須の条件であることは云うまでもなく、そのための環境整備も重要な要素である。

2. 参加学会

当面は地球電磁気・地球惑星圏学会、日本火山学会、日本地震学会、日本測地学会、日本惑星科学会の五学会が参加を検討する。

3. 既存ジャーナルとの関係

JGGとJPEを引き継ぐものとし、ポリウムナンバーもこれを考慮する。

4. 新ジャーナルの内容、形式

(1) 名称：地球惑星科学を包括するような名称とする。具体的には、(a) Earth and Space Sciences、(b) Earth Planetary, and Space Sciences、(c) Journal of Earth and Space 等が適当であろう。

(2) スコープ：地球惑星科学関連学会合同大会を念頭に置き、境界領域をも含んだ幅広い範囲を扱う。ただし、内容はある程度編集側でコントロールできるようにしておくことが望ましい。

(3) 構成：レギュラー、レター、レビュー、ニュースの4セクションより構成する。ただし、ニュースセクションは通しページに含めないことで論文とは区別する。

(4) 形式：A4サイズ、2段組み、1200ページ程度、月刊とする。

5. 新ジャーナルの特徴

以下の三点で特徴を持たせる。

(a) 地球惑星科学関連の日本で唯一の包括的ジャーナル：日本で初めての地球惑星関連総合ジャーナルであり、これを見れば日本の地球惑星関連科学の現状把握にも役立つ。

(b) レビュー及びニュースセクションを含む：とりわけ、ニュースセクションの導入により、外国から見て論文以前の段階での日本の動きが掴めるようになり（例えば、新規プロジェクトの開始等）、情報発信元としての役割を果たす。

(c) レターを重視：電子メールを利用したレビュープロセスをとることにより、情報化時代に対応した迅速な出版を目指す。また、ページ数制限を緩和し（6ページ程度）、投稿しやすい環境を作る。

6. 投稿

(1) 資格：投稿は会員、非会員の区別なく自由である。

(2) 方法：電子メールを活用して迅速な処理を行なう。ただし、郵送も併用する。

7. 配布形式

最終的には購読制を目指す移行期間の措置は各学会に一任する。ただし、一巻当りの価格は全ての学会員に平等とする。

8. 財政

(1) 出版社との契約形態：出版社には出版業務と販売を委託し、編集の主導権は学会側が持つことにより、学会誌としてのジャーナルを位置づける。

(2) 必要経費：個人購読用として約 1000 部の配布を想定した場合、学会外からの補助金、支出可能な学会からの補助金、及び講読料併せて約 1600 万円（A 出版社、送料含まず）または約 1890 万円（B 出版社、送料含む）が必要と見込まれる。従って、補助金総額が 1000 万円から 1200 万円ならば、個人講読料は約 6000 円から 4000 円（送料別）となるものと見込まれる。個人購読数が 1000 部を越える場合は単価はさらに下がると見込まれる。

9. 編集及び管理

(1) 編集委員会：編集委員長を 1 人おき、その下にレギュラーページの編集委員を分野ごとにおく。また、レターページの編集委員をこれとは別に二、三人程度おく。編集委員会には学会色を持ち込まな

い。

(2) 編集委員長及び編集委員の選考方法：各学会の代表で構成される編集委員長選考委員会を作り、編集委員長を決める。その後、編集委員長の判断で編集委員を選考する。ただし、編集委員長選考委員会は編集委員の選考に関しても意見を述べるができる。

(3) 運営委員会：出版状況の把握や財政面の管理を行う為に各学会からの代表で構成される運営委員会を設置する。運営委員会は編集委員長と相談してニュースセクションの編集も担当する。

10. サーキュレーション、質、購読者数を伸ばすための企画

(1) 特集号：良質の特集号を組むことによりサーキュレーションが良くなることが期待される。特集号としては大型プロジェクト、国際シンポジウム、合同大会シンポジウム及び共通セッション、分野間に共通の物理等いろいろ企画することが望ましい。

(2) 英文校閲：非英語圏からの投稿論文に対して英文チェック体制を持つ必要がある。このことにより、投稿数の増加、論文の質の向上が期待される。これにより、質の高い論文が集まりやすくなると期待される。

11. 新ジャーナル成立条件

(a) 学会外から現状と同等以上の補助金が得られること。特に、発足時には複数の学会（可能な）からの補助金も必要。

(b) 複数学会による合同ジャーナルに対する学会外の補助金の申請が認められること。

12. 新ジャーナルへの移行時期

本案が各学会で検討され、賛同が得られれば、合同誌発足に向けての具体的な作業を開始すべきである。できれば、1998 年 1 月に新ジャーナルへ移行することが望ましい（この場合、編集委員会及び運営委員会活動をも念頭に置いた作業とすることが望ましい）。

第 2 回第 3 回作業委員会議事録は大部のため掲載できませんでした。<http://www.kurasc.kyoto-u.ac.jp/sgepss> に収録してありますのでご覧ください。

お知らせ

・国際シンポジウム「地球磁気圏尾部研究の新たな展望」の案内

平成8年11月5日～11月9日(5日間)の予定で、石川県教育会館(金沢)にて上記シンポジウムを開催いたします。

このシンポジウムの主たる目的は、日米欧露の宇宙科学研究機関(IACG)が共同で展望している衛星ネットワーク観測のデータに基づいて、地球磁気圏尾部の構造とダイナックスに関する総合的な検討を行うに事あります。中心となる資料は宇宙科学研究所のGEOTAIL衛星の観測データで、主な課題としては次の事を予定しています。

- 1) 磁気圏尾部では太陽風起源と電離層起源のプラズマが同時に観測される事がある。一見、電磁流体力学の「磁場凍結の法則」に反するこの混合過程はどのようにして起きるのか。
- 2) 尾部のプラズマは太陽風プラズマより高い温度を持ち、プラズマシートの中央ではその比が一十倍にも及ぶ。プラズマ加熱はどのようにして起き

るのか。

- 3) 磁気リコネクションを可能にする磁気中性線でのエネルギー散逸は。どのようなマイクロ過程に基づいているのか。
- 4) 尾部プラズマの速度分布関数は、ビーム・リング分布など、様々な非平衡状態を示す。これらは、どのような加速過程によって作られるのか。また、生成や緩和の過程は波動現象とどのように関わっているのか。

Conveners: A. Nishida (ISAS) and D. N. Baker (LASP)
Calendar:

平成8年6月中旬 Second Circular
平成8年7月30日 Preregistration Deadline
平成9年9月15日 Abstract Deadline

詳しくは、tail@gtl.isas.ac.jp (InterNet) に電子メールにて、或いは宇宙科学研究所 向井利典まで、ご連絡下さい。

平成7年度決算・平成8年度予算書

第99回総会において、平成7年度決算、平成8年度予算および学会基金と特別会計(田中館賞、長谷川・永田賞)の平成7年度決算が、次の通り承認されました。平成7年度の決算につきましては、会費を値上げた初年度であることと、正会員の会費納入率が94%であったため、健全な財政運営ができました。今後も、会費の銀行口座からの自動引き落とし等、会員皆様のご協力をお願い申し上げます。

(会計担当運営委員)

<学会基金>

科 目	決 算 額	備 考
当期繰入金	810,000	
前期繰越金	10,159,904	
合計	10,969,904	

(注) 利子は一般会計へ繰入

<特別会計> (平成6年度)

田中館賞

収入の部		支出の部	
科 目	決 算 額	科 目	決 算 額
利子収入	10,989	賞 牌 代	63,860
前期繰越金	846,006	次期繰越金	793,135
合 計	856,995	合 計	856,995

長谷川・永田賞

収入の部		支出の部	
科 目	決 算 額	科 目	決 算 額
永田先生			
ご家族寄付金	50,000	賞 牌 代	370,800
利子収入	13,192		
前期繰越金	383,934	次期繰越金	526,326
合 計	897,126	合 計	897,126

<注> 平成7年3月26日の運営委員会において、永田先生御遺族からの寄付金50万円を、平成7年度から、長谷川・永田賞の基金に繰り入れることが決定された(会報148号参照)。

平成7年度決算書 平成7年4月1日～平成8年3月31日

収入の部

科目	7年予算額	決算額	差異	備考
会費	8,158,400	8,354,345	-195,945	
正会員	6,307,200	6,601,000	-293,800	
正会員(学生)	378,000	369,000	9,000	
海外会員	223,200	184,345	38,855	
賛助会員	1,250,000	1,200,000	50,000	
出版助成金	18,739,000	7,730,000	11,009,000	
予稿集売上代	650,000	746,300	-96,300	
大会参加費	400,000	423,000	-23,000	
利子収入	350,000	191,596	158,404	
雑収入	30,000	40,344	-10,344	
小計	28,327,400	17,485,585	10,841,815	
前期繰越金	1,155,078	1,155,078	0	
合計	29,482,478	18,640,663	10,841,815	

支出の部

科目	7年予算額	決算額	差異	備考
管理費	3,030,000	2,839,429	190,571	
業務委託費	2,400,000	2,427,473	-27,473	
通信費	400,000	305,001	94,999	
印刷費	100,000	45,823	54,177	
旅費	100,000	24,000	76,000	
雑費	30,000	37,132	-7,132	
事業費	23,919,000	12,930,877	10,988,123	
会誌分担金	20,589,000	9,584,000	11,005,000	
編集補助費	500,000	423,800	76,200	
編集発送費	700,000	816,510	-116,510	
会報印刷費	300,000	246,379	53,621	
会報発送費	350,000	334,937	15,063	
大会開催費	800,000	762,021	37,979	
予稿集印刷代	600,000	763,230	-163,230	
広報活動費	30,000	0	30,000	
名簿作製費	0	0	0	
その他	50,000	0	50,000	
基金交流事業費	700,000	390,000	310,000	
基金繰入金	550,000	810,000	-260,000	
予備費	100,000	0	100,000	
小計	28,299,000	16,970,306	11,328,694	
次期繰越金	1,183,478	1,670,357	-486,879	
合計	29,482,478	18,640,663	10,841,815	

平成8年度予算書 平成8年4月1日～平成9年3月31日

収入の部				
科目	8年予算額	7年度予算額	決算額	備考
会費	8,151,600	8,158,400	8,354,345	
正会員	6,307,200	6,307,200	6,601,000	584*12000*.90
正会員(学生)	421,200	378,000	369,000	78*6000*.90
海外会員	223,200	223,200	184,345	62*6000*.60
賛助会員	1,200,000	1,250,000	1,200,000	24*50000
出版助成金	18,739,000	18,739,000	7,730,000	
予稿集売上代	740,000	650,000	746,300	
大会参加費	420,000	400,000	423,000	
利子収入	200,000	350,000	191,596	
雑収入	30,000	30,000	40,344	
小計	28,280,600	28,327,400	17,485,585	
前期繰越金	1,670,335	1,155,078	1,155,078	
合計	29,950,935	29,482,478	18,640,663	
支出の部				
科目	8年予算額	7年予算額	決算額	備考
管理費	3,030,000	3,030,000	2,839,429	
業務委託費	2,400,000	2,400,000	2,427,473	
通信費	500,000	400,000	305,001	
印刷費	50,000	100,000	45,823	
旅費	50,000	100,000	24,000	
雑費	30,000	30,000	37,132	
事業費	24,673,000	23,919,000	12,930,877	
会誌分担金	20,593,000	20,589,000	9,584,000	分担金1,854,000 +
編集補助費	500,000	500,000	423,800	'96助成金予算額
発送費	700,000	700,000	816,510	18,739,000
会報印刷費	250,000	300,000	246,379	
会報発送費	350,000	350,000	334,937	
大会開催費	770,000	800,000	762,021	
予稿集印刷代	750,000	600,000	763,230	
広報活動費	30,000	30,000	0	
名簿作製費	700,000	0	0	
その他	30,000	50,000	0	
基金交流事業費	700,000	700,000	390,000	
基金繰入金	200,000	550,000	810,000	
特別事業費	300,000	0	0	第100回大会記念事業
予備費	100,000	100,000	0	
小計	28,703,000	28,299,000	16,970,306	
次期繰越金	947,935	1,183,478	1,670,357	
合計	29,650,935	29,482,478	18,640,663	

地球物理学研究連絡委員会議事抄録

(第16期第4回)

日時 平成7年12月25日(月) 13時30分～16時30分
会場 日本学術会議第4部会議室(6階)
出席者 上田、大家、杉ノ原、瀬川、高橋、竹内、藤井の7
委員、中村(日本学術会議事務局)

議事

上田地物研連委員長の司会により議事が進められた。
まず、一部修正の後、前回の議事録を承認した。

(1) 諸報告

*測地学審議会の建議「地球科学における重点的課題とその推進について」のその後の経過。

*上田委員長:この建議の中で、海洋科学にかかわる表現が弱いことが指摘され、鳥羽良明測地審議会臨時委員が中心となって、海洋科学研連と海洋物理研連に諮り、「海洋科学の推進について」なる要望書を測地の樋口気象水象部会長に提出した。

*杉ノ原委員:海洋科学に関する気象水象部会への元々の提案書の書き方が悪かったこともあったと反省している。今回の要望書では、「現象解明の海洋学」と同時に「予測する海洋学」確立への曲がり角の時代であることに焦点を絞っている。

これに関連して、測地学審議会のありかたについて種々議論された。

*宇宙空間科学コスパー総会について

瀬川委員:第32回宇宙空間科学コスパー総会を国内で開催することに関して、宇宙空間研連は日本学術会議にその共催を申請しているが、これにつき、地物研連に対し、それを支持するための副審IIの提出が要請されていたが、前回の本委員長の結論に従い、先日それを提出した。

*第122回日本学術会議総会報告

上田委員長:10月24日、25日に各部会、10月25日、26日に総会が開催された。この総会で「高度研究体制の早期確立をめざして」と題する要望書が出された。

この要望書は戦略的研究方針を志向するものであり、次のような内容を持つ。(1)研究費倍増 (2)研究環境の整備 (3)大学、直轄機関、企業の3つのセクターのバランス(4)研究優先順位を決め、総合的研究ネットワークをつくる。伊藤日本学術会議会長は次のような意見をのべた。

科学技術基本法が成立したことを重く見る。これに関連し、科学技術会議を一層強力にすべきである。また、日本学術会議の中にある「脳の科学とこころの問題特別委員会」が扱う問題等に特に注目したい。

以上の報告に対して、次のような意見があった。

ネットワークは制度化されたものであるべきだ。

研究予算の配分に関して、一旦配分された予算を、さらにその上から全体的に眺む人が必要。米國

NSFの予算についても同じことが言われている。

日本のネットワークは具体性がない。単に言葉を弄んでいるように見える。

地震予知については、ネットワークが巨大化し、他を排除しかねない面がある。

地震予知に関しては、これまでのいろいろな問題点を反省する意味の自浄委員会ができていていると聞いている。

地方大学は中央とは違った問題を抱えていることを知ってほしい。多額の予算もなし、巨大設備もなし。頼りとするものは人間である。この人間もなかなか来ない。助手・助教の任期制が問題になっているが、任期制を付けたら地方には誰も来なくなることを憂う。

*ICDP報告

上田委員長より、ICDP(国際陸上科学掘削計画)について、地質学総合研連の佐藤正委員より対外報告が出されたとの報告があった(平成7年9月)。その内容は、ICDPへのわが国の参加についてである。

(2) IUGGの日本招致について

前回の本委員会の議論を受けて、上田委員長は、個人的に、各方面との接触を図り、2003年のIUGG日本招致について意見を求め、ある程度の感触を得た。一方、地物研連関連研連の意見は次のようであった。

測地研連:協力する。会場が問題。

地震研連:協力する。

地球電磁気研連:協力する。

気象研連:協力する熊本市が会場誘致に熱心。

陸水研連:協力する。資金と会場が難しい。

火山研連:協力する。場所は京都か。

海洋物理研連:協力する。

また、今後は、学会の意見が重要であるという意見が出された。

(3) 地球科学におけるパラダイム(Paradigm)

日本学術会議第3常置委員会が11月に関連研連に対して出した「パラダイム(規範)の転換」に関する調査依頼について、種々の議論を行った。これについては、上田委員長が取りまとめ、地物研連の意見として提出することになった。

(4) 地球環境データ処理体制

大家委員より、地球電磁気学研連がまとめた標記資料の説明があった。この資料には、地球環境データ機構と地球環境データ整備10ヵ年計画の提案がある。これにつき意見交換を行った。地物研連主催のワークショップを行うという提案があったので、それについては大家委員が対応することになった。

次回 地物研連(第16期第5回)

日時 平成8年5月10日(金) 13時30分～16時30分

会場 日本学術会議

学会創立当時の思い出

—地球電磁気学会第1回懇親会—

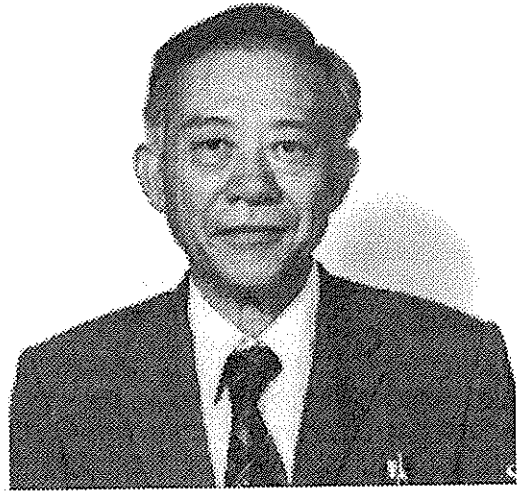
平尾邦雄

本学会が発足してから50年になるとは数えて見れば当たり前のことだがいざ学会会長から何か書けと言われるとあらためて月日の経過を感じさせられる。そうして私が太田、前田、力武先生に続いて頼まれたことを知って、益々感慨深い思いに駆られるのである。設立当時の私は全くの駆け出しで長谷川先生を始めとして沢山の先生方が、永田先生の部屋に集まられて相談されて居たことは見てはいたが、その内容等知る由もなかった。一寸思い出だけでもその時に集まっておられた数人の先生方が御亡くなりになって居るのである。学会の歴史も50年ともなれば、今盛んに活躍されている現役の方々にとっては正に子供の時か或は未だ生まれて居られない時の事として映るのであろう。

私は大学は2年半で追い出され卒業証書を貰う事も無く浜松の近くに在った海兵団に入れられた。私は本郷に下宿していたので入団の前日まで教室に顔を出して、丁度京都に帰られる長谷川先生とご一緒に東海道線に乗り先生に送られる様にして海兵団に行ったことを思いだす。それはともかく敗戦となり、私は海軍気象部に居てお茶の水に居たので解散と共に地球物理教室を訪れた。1年間赴任の方法も無いまま気象部のはいる防空壕掘りをさせられていたので、研究生活に戻りたく永田先生にお願いした所囁託と言う形で置いて頂いたのが、現在の私の歩んだ道の始まりであった。確か力武先生のお手伝いもして成田層の磁化の測定をしたことも覚えている。その内に永田先生は余りお気に召さなかったかもしれないが地電流の研究に手を染める事になった。桜島の噴火や、福井地震、南海地震の際に調査に加わりながら地電流の観測を続けていた。その頃日本地球電磁気学会の設立準備は着々と進められていたのである。

手許に懐かしい JOURNAL OF GEOMAGNETISM AND GEOELECTRICITY VOL.1. NO.1 がある。その最後の頁に第4回までの総会の事が載っており、第1回総会は1947年5月12日から14日まで東大で開かれ、発表論文数36、参加者100人と書かれてある。1947年は昭和22年即ち敗戦の翌々年で実質的には2年足らずと言う短期間で新しい学会を発足させるという張切りかたであった。敗戦後何ヶ月も経たない内にGIとして日本に来ていた若い地球物理学専攻の人らしいアメリカ人が教室に出入りしていた事を覚えているが、外国から当時の日本の学問の状態に興味を持たれていた事も学会創立の一つの動機にも成ったかもしれないが、それ以上に当時はあちこちに所謂闇市が有り色々な物資も出回って来ていたがまともな暮らしをしている人々にとっては真に苦しい生活を強いられていた時であった。それにもめげず学会を支えようとしてきた人はそれまでの戦争という馬鹿げた事態に反発する気持がそうさせたのかも知れない。

さてここで本題に戻ろう。学会総会があればその後には必ず懇親会が催される。特に学会創立となるとそれ迄お互いに面識の余り無かった人々が今後も長く研究の面



を始めとして色々な面で付き合う事になる。お互いを良く知る事こそ学会を保って行くのに大事な事である。と直接お聞きした訳ではないが初代の学会委員長となられた長谷川万吉先生を始め大先生方はその後も懇親会を大事にされた。前に申した様に当時は懇親会をするにしても今の様に適当な施設を利用してそこに頼めばよいと言う御時勢ではなかった。必然的に準備は全く内輪でするほり他にはなかった。

料理とお酒は最も大事な2本柱である。料理は学生も材料調達に駆りだされ、それを使って教室にお勤めの女子職員が整える事になったが、お酒の方は私たち新参の男子職員が準備することになった。お酒は当時を知る方々はご存じだと思うが、当然まともなお酒は大変高く手に入れることは至難であった。また世の中には安い酒も有った様であるが、メチルアルコールを基にした酒で失明した人の記事が連日新聞を賑していた状態だったのである。そこで私達は当時地震計の記録ドラムの煤付けをする時に松脂を溶かすためのエチルアルコールが事務室に保管されている事に目を着けた。もう時効になっていると思うが、それを少々頂く事にしたのである。これなら絶対に安全である。農学部のカフェテリアに何を調べたら美味しく飲めるかを聞いて枸橼酸等を入れ適当に希釈して懇親会の飲物を造ったのである。こんなお酒でも当時はなかなか手に入れる事は難しかったのである。

結果は上々昔の前田邸跡にあった教室の二階の大教室での懇親会参会の方々大変お喜びになって私共も面目を果した次第であった。お陰でその夜はお泊りになった方々もあり夜おそくまで話に花が咲いたのである。長谷川先生もお得意の「赤いバラ」を披露され長く電磁気学会の歌として懇親会の一つの名物だった事も思いだされるし、学会懇親会も今も続いて居る事は大変嬉しい事である。

最近私は何かと所用があつて学会に出席していない事を自分でも残念に思っているが、この様な雑文で学会の創立当時の様子を知って頂く事に役立てば望外の喜びです。

SGEPSS Calendar

1996年

- 7月1日～3日 科学衛星・宇宙観測シンポジウム 於 宇宙科学研究所
 - 7月8日～11日 MT Data International Workshop at Geological Survey of Japan, Tsukuba
 - 7月12日～18日 13th Workshop on Electromagnetic Induction in the Earth
at Onuma International Seminar House, HOKKAI DO
 - 7月14日～25日 COSPAR Scientific Assembly in Birmingham, UK
 - 7月15日～16日 アストロダイナミクス・シンポジウム 於 宇宙科学研究所
 - 7月23日～27日 WPGM (Western Pacific Geophysics Meeting)
and SEDI (Study of the Earth's Deep Interior)
at Brisbane Convention and Exhibition Centre Brisbane, Australia
 - 8月4日～14日 International Geological Congress in Beijing, China
 - 8月11日～15日 AGU Chapman Conference on Coronal Mass Ejection: Causes and Consequences
in Bozeman, Montana, USA
 - 8月28日～9月5日 URSI General Assembly in Lille, France
 - 9月9日～11日 International Workshop on Planetary Radio Emissions V in Granz, Austria.
 - 10月21日～24日 地球電磁気・地球惑星圏学会第100回総会並びに講演会
於 郵政省通信総合研究所ほか
 - 11月 AGU Chapman Conference on Shallow Level Processes in Ocean Island Magnetism:
Distinguishing Mantle and Crustal Signatures
 - 11月5日～9日 AGU Chapman Conference on the Earth's Magnetotail: New Perspective
於 石川県教育会館
 - 12月15日～19日 AGU Fall Meeting in San Francisco, USA
- 1997年
- 3月13日～19日 国際シンポジウム: 第5回宇宙空間シミュレーション学校
(5th International School/Symposium for Space Simulations: ISSS-5)
於 京都大学宇治キャンパス
 - 3月25日～28日 地球惑星科学関連学会合同大会 於 名古屋大学 (旧教養部)

SGEPSSカレンダーは会員からのお知らせで成り立っております。国内外の学会、研究会、委員会、予稿締切等、皆様に広めるべきことがございましたら会報担当までお知らせください。

地球電磁気・地球惑星圏学会

会長 國分 征

〒442 豊川市穂ノ原3-13 名古屋大学太陽地球環境研究所 phone:05338-9-5182 fax:4-8806

総務 湯元清文

〒812-81 福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学理学部地球惑星科学科

phone:092-641-1101 ex. 4157 fax 643-1196 email:yumoto@geo.kyushu-u.ac.jp

庶務 渋谷秀敏 (会報担当)・森岡 昭

〒860 熊本市黒髪2丁目39-1 熊本大学理学部地球科学科

phone:096-342-3417 fax 342-3411 e-mail:shibuya@sci.kumamoto-u.ac.jp

運営委員会 〒113東京都文京区本駒込5丁目16番9号学会センターC21(財)日本学会事務センター気付

03-5814-5810 会員業務 (入退会、住所変更等、会費、会誌)

03-5814-5801 学会業務 (庶務、窓口、渉外)

03-5814-5820 ファクシミリ

入会申し込みは運営委員会宛、研究助成金案内は総務宛、会報への投稿は担当庶務宛ご連絡ください。
会報へのご提案、ご意見、情報提供、寄稿をお待ちしています。

地球電磁気・地球惑星圏学会名簿調査アンケート用紙

今年の秋に学会名簿の改訂版を出す予定です。現在の名簿の記載事項に変更のある方は下記の締め切り日までにこのアンケート用紙に記入の上、学会事務センターにお送り下さい。

締め切り日 平成8年7月31日 (厳守して下さい。)

(この用紙をコピーしてお使い下さい。訂正部分は赤字で目立つようにして下さい。)

- 名簿訂正のみ
会誌送付先も変更

漢字氏名 _____ 会員番号 _____ (正、学生)会員

ローマ字氏名 _____ (名字、名前の順)

所属機関名称 _____

所属機関住所 〒 _____

電話番号 _____ (代表、直通) 内線 _____

FAX番号 _____

E-mail _____ (主なもの一つ:なるべくインターネット)

自宅住所 〒 _____

自宅電話番号 _____

最終学歴 _____ 大学 _____ 学部 _____ 学科 19 _____ 年卒業

_____ 大学大学院 _____ 研究科 (修士、博士)課程

_____ 専攻 19 _____ 年修了

専門 (次の中から一つ選んでチェックして下さい)

- | | | |
|------------|-----------|-----------|
| 宇宙線物理 | 岩石磁気・古地磁気 | 電波工学 |
| 電波・赤外天文 | 地球・惑星内部 | 環境科学 |
| 惑星間空間 | 地球内部電磁気学 | 生物科学 |
| 太陽物理 | 年代学 | 宇宙工学 |
| 地球・惑星磁気圏 | 火山学 | 宇宙空間プラズマ |
| 地球・惑星電離圏 | 地震学 | 地球・惑星探査 |
| 地球・惑星大気 | 海洋学 | 測地学 |
| 太陽系・惑星起源論 | 物理探査 | 地球・惑星地質学 |
| 地球・惑星磁場生成論 | 磁気探査・磁気異常 | 地球・惑星開発工学 |

(送付先) 〒113 東京都文京区本駒込5-16-9 日本学会事務センター内
 地球電磁気・地球惑星圏学会 名簿訂正係